「シュリー・クリシュナ：神の化身」

2018年9月16日

逗子例会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子協会

　シュリ－・クリシュナの本当の誕生日は今年は9月2日でした。インドでは、シュリー・クリシュナの誕生日を「シュリー・クリシュナ・ジャンマーシュタミ」と呼んでいます。「ジャンマ」は「誕生」、「アーシュタミ」は「8日目」という意味です。インドの伝統では、神の化身や聖者の誕生日はインドの太陰暦に基づいて決められます。

**宗教的な祝祭日の目的**

神の化身や聖者の誕生日は何のために祝うのでしょうか。ただのお祭りでしょうか。「祭り」のイメージは「楽しい」ことですね。イルミネーションや色々な飾り、たくさんの食べ物、ごちそうなど、楽しいことです。良い例がクリスマスでしょう。最近のクリスマスは豪華ですが「キリスト抜き」のクリスマスになっているようです。たいていの人は、祝日の本当の目的を忘れてただ楽しむためにお祝いしているのではないでしょうか。実のところ、イエス・キリスト自身はクリスマス・イブを祝うかどうかなど気にしていないでしょう。クリシュナも自分の誕生日を祝ってもらう必要などないでしょう。ではなぜこのように祝うことが必要なのでしょうか。買い物をしたり、皆で集まってパーティーをするためでしょうか。

今日の祝賀会のために、信者さんたちが祭壇をこのようにきれいに飾り付けしてくれました。皆さん協力して、供物や果物、花などの準備をしてくれました。しかし、これで終わりでしょうか。このように祝うことの本当の目的は何でしょうか。

（参加者）「神様のことを考えるためです」

「神様のことを考える」とは、神様の姿を心に思い浮かべるだけでなくその教えについても考えるということでしょう。では、毎日神様のことを考えていたら、それでもこのように祝賀会を行うことは必要でしょうか。必要なのであれば、なぜなのだと思いますか。

（参加者）「神様の恩寵をいただくためです」

（参加者）「神様に敬意を払うため」

（参加者）「神様の誕生日は縁起のいい日だから、そういう日に神様の教えや神様がしたことを考えるのはいいと思います」

（参加者）「占星術では、神様の誕生日は幸運を呼ぶ日だから、そういう日に瞑想をすると大きな成果が得られます」

いい答えですね、そこまで考えたことはありませんでした（笑い）。私の考えではこうです。神様のことを毎日考えるのであればお祝いをするのはあまり必要ないでしょうが、私たちは忘れやすいものです。神様のことを毎日考える、しょっちゅう考える、ということはあまりないですね。仕事や日々やることに気持ちが強く向いていて、神様のことを完全に忘れてしまいがちです。だから昔の聖者は、少なくとも1年に1日は神様のことを思い出すようにこのような慣習を始めたのです。毎日神様について考えることができれば理想的ですが、普通の人はなかなかできません。だからこうして皆で集まって誕生日をお祝いし、神様のことを思い出して祈りを捧げます。

日本の元旦を考えてみてください。1年365日のうち、たった1日この日だけ、皆さん神様のことを思い出して神社やお寺にお参りして祈りますね。もしこのような伝統がなければ、いつ神様のことを考えるでしょうか。おそらく年に1日でも神社にお参りする人はいないのではないでしょうか。日本には「苦しい時の神頼み」ということわざがありますが、苦しい時でさえ神社にお参りはしないですね。

インドには、クリシュナやラーマ、お釈迦様のような神の化身がたくさんいて、ヴィヤーサのような聖者もたくさんいます。協会には、さらにシュリ－・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー、スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）もいます。逗子で行うこうした方々の誕生日の祝賀会では食事をするだけでなく、プログラムの一部として講話、賛歌、聖典朗読、聖句詠唱があります。これは神様を思い出すためにやっています。

言い換えると、私たちはこういう祝賀会で神様のことを思い出し神様のことを考えても、しばらくすると忘れてしまうのです。次の祝賀会が来るとまた神様のことを思い出します。このように、「思い出す、忘れる」というプロセスを何度も繰り返しながら少しずつ前に進んで、神様への想いを強めていくのです。私たちの霊的レベルは一晩で急に高くはなりません。少しずつ成長するしかないのです。皆さん、内省すれば私の言うことがよく分かるでしょう。今日は講話の初めに、シュリー・クリシュナの生誕祝賀会を行う目的を皆さんにきちんとお伝えしたく、このような話をしました。

**神の化身**

さて、今日の講話のテーマは「シュリー・クリシュナ：神の化身」です。「神の化身」という概念は、ヒンドゥー教以外の文化ではあまり見られません。日本でもあまりないでしょう。しかしヒンドゥー教には、神の化身について細かいところまで説明した完全な概念があります。ごく簡単に言えば、神様は遍在で全ての生き物の中に現れています。命のない物体の中にも神様はいますが、現れてはいません。生き物の中ではそれぞれ現れている度合いが異なります。神様は聖者の中により多く現れており、最も多く現れているのが神の化身です。神の化身には、普遍的な愛、調和、純粋さ、慈悲、進んで他者を助ける精神など、神様の様々な特徴が現れています。

インドでは通常、神の化身は10人いるとされています。一方、聖典の『バーガヴァタム』では24人、『バガヴァッド・ギーター』では無数とされています。この世に不道徳や無神論、罪が広がると、神の化身が現れます。神が化身する目的の一つは、聖典の教えが正しく真実であることを示すためです。

近代の西洋哲学は神の存在そのものを疑い、物質主義が全てです。この風潮は広まっています。「聖典に書いてあることは作り話だ」「嘘だ」「誤りだ」と言って、聖典を否定します。シュリー・ラーマクリシュナが現れたのはこのような状況でした。神様は本当に存在し、聖典に書いてあることはすべて真実で正しい、というのを示すことがシュリー・ラーマクリシュナの使命でした。

シュリー・クリシュナが生まれた時も同じような状況でした。講話の前に読んだ聖典の中にあったように、当時は邪悪な暴君カンサ王が治めていた時代でした。カンサは実の妹を殺そうとし、結局殺さなかったけれども、その代わりに妹の産んだ子供たちを次々に殺したような人間です。クリシュナが生まれたのは、このような悪者を退治して良い人々や罪のない人々を守るためでした。主クリシュナは『バガヴァッド・ギーター』の中で自身が生まれた理由を次のように説明しています。

不道徳がはびこり邪悪な者が増えた時

悪しき者を罰し善良な者を救うため

私は何度も生まれ出る

真理へと導くために

私は繰り返し生まれる

神の化身が生まれるのはこのような目的があるからです。悪人を罰し善人を助けるためだけでなく、幸福や平安、真理へと人々導くために、神の化身は現れるのです。

**生まれる理由の違い**

では神の化身と聖者、普通の人は何が違うのでしょうか。

まず、普通の人が生まれてくるのはカルマの法則の影響があるからですが、神の化身は自分の意思で生まれてきます。聖者もカルマの法則の影響を受けることがありますが、神の化身は決して影響を受けません。二つ目に、聖者は生きている間に有名になることがあり、時にはマスコミの宣伝などのおかげであっという間に名前が広がることもありますが、死んだ後はだんだんと名声は失われていきます。しかし、神の化身の場合はちょうど反対で、生きている間はあまり知られていなくても、死んだ後に少しずつ注目されるようになって有名になります。イエス・キリストやお釈迦様、ムハンマド、シュリー・ラーマクリシュナなどは、生きている間どれほどの人に知られていたでしょうか。そして今、このような方たちを知っている人はどれほどたくさんいるでしょうか。普通の人と神の化身を比べた場合も、もちろんこの点は大きく違うことはよく分かりますね。

**大きな相違点**

神の化身と聖者の違いをもう少し考えてみましょう。ホーリー・マザーとヨーギン・マーの会話に面白いものがあります。ヨーギン・マーはシュリー・ラーマクリシュナの直弟子で、ホーリー・マザーの従者をしていた女性ですが、ある日、マザーがヨーギン・マーにこう言いました。「ヨーギン、私はこれまでヴァーラーナシーやブリンダーバン、プリーなど色々な聖地に行ってたくさんの聖者を見たの。でも、シュリー・ラーマクリシュナはやはり特別な方ね」これに対してヨーギン・マーが非常に面白いコメントをしました。「マザー、そういう聖者は自分が救われるために霊性の修行をしています。でも、シュリ－・ラーマクリシュナは救いを与えるために現れた方ですからね」これは大変大きな違いですね！

また、他にも大きな違いがあります。聖者が与える影響は宗教においてだけですが、神の化身は宗教だけでなく社会、文化、経済、哲学など幅広い分野で影響を与えます。

ヨーロッパを旅行して美しい教会や彫刻、絵などを見ると、キリスト教がヨーロッパの文化や建築にとても大きな影響を与えていることが分かります。これはすなわち、イエス・キリストが与えた影響です。もしヨーロッパ文化からキリストの影響を除いたら、一体何が残るでしょうか。同じように、インドの文化からラーマやクリシュナ、お釈迦様のような神の化身の影響を除いたら、ほとんど何も残らないでしょう。これは神の化身の大きな特徴ですね。

**それぞれの特徴**

さて、神の化身にはそれぞれ、個性のような独自の特徴があります。シュリー・クリシュナの独自の特徴は何でしょうか。

（参加者）「無執着です」

シュリー・クリシュナには神のさまざまな性質がありました。その中には、他の神の化身にも共通して見られる性質もありますが、クリシュナに特に強く見られる特徴もあります。例えば、シュリー・ラーマクリシュナの場合は、「放棄」が特徴でした。お金に触ると激しい痛みを感じましたし、もしベッドの下に何ルピーか置いてあったらベッドに横になっただけで体がひどく痛みました。シュリー・クリシュナの場合は、「無執着」が最大の特徴でしょう。ブリンダーバンを大変愛していたクリシュナですが、義務を果たすためにこの地を離れてマトゥラーに行くことになりました。ゴーピー（乳搾りの乙女）たちは別れを悲しみ大泣きしましたが、クリシュナは少しも悲しみませんでした。必要があれば、最も愛しているものを一瞬で手放すことに何のためらいもなかったのです。これがシュリー・クリシュナの特別なところです。

**クリシュナの最大の特徴**

もう一つ際立った特徴があります。ヴィシュヌ派の聖典によると、神様に対する信者の態度（バーヴァ、bhava）には五つあるとされています。一つ目は「シャーンタ」（shanta）すなわち静かで穏やかな態度です。古代の聖者のほとんどは神様に対してこの態度を取っていました。

次は「ダーシャ」（dasya）すなわち召使いの態度です。信者は神様を主人と見、自分を忠実な召使いと考えます。この態度の例として有名なのがハヌマーンのラーマに対する態度です。スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）も自分をシュリー・ラーマクリシュナの弟子と見なしていて、そこから「Ramakrishna-dāsā-vayam」という賛歌を作ったのです。

次は「サッキャ」（sakhya）で、信者は神様を近しい友人と考えます。シュリー・クリシュナの友人である牛飼いの少年たちが、この例です。牛飼いの少年たちは友だちのクリシュナが大好きなあまり、クリシュナに果物をあげる前に味見をしていました。普通は、神様に捧げる食べ物を自分が先に一口食べるということは決してしません。そのようなことをしたら神様を冒涜することになります。しかし、友だちだったら、一番甘くておいしいものを食べさせてあげたいという強い気持ちがあれば構わず味見するでしょう。

シャーンタの態度では信者と神様の間にはそれなりの距離があります。ダーシャの態度では、信者にとって神様はより近い存在であり信者は神様を愛していますが、サッキャの態度では神様はさらに近い存在となります。

次は「ヴァーッツァリア」（vatsalya）すなわち我が子に対する母親の態度です。信者は神様の母親ですから、信者の方が神様よりも上であると考えます。そうしないと子供の面倒を見ることができませんね。この関係では、神様は信者にとってより一層近い存在で、信者に頼りきっています。

そして最後が「マドゥラ」（madhura）の態度で、神様を自分の恋人と考えます。これは、男女の間の普通の愛とは全く違いますから、普通の信者がこの態度を理解するのは難しいです。この関係には体意識は全くありません。この点をよく理解しないまま実践すると、堕落してしまいます。しかし聖典では、この態度を神様に対する最高の態度であるとしています。この態度には他の四つの態度全てが含まれているからです。

神様に対するこの五つの理想的な態度の中から、信者は、心の中に思い浮かべたクリシュナのイメージに対してどの態度を取ることもできます。シャーンタの態度では神様を父親と見なします。ダーシャの態度では「シュリー・クリシュナは私の主人、私は召使いだ」と考え、サッキャではクリシュナを親友と考えます。ヴァーッツァリアではクリシュナを子供と見て、赤子クリシュナのイメージに限りない愛情を注ぎ心を込めて世話をします。信者の中には今でもこの態度を取る人がいます。マドゥラの態度を実践するのはまれですが、夫婦の間などではこの態度を取ることも可能です。シュリ－・ラーマクリシュナは、妻が夫に対してマドゥラの態度を取るのは何の危険もなく、かえって夫婦の関係が高められると言っています。このように、信者はシュリー・クリシュナに対してこの五つのうちどの態度で接することもできるのですが、これはシュリー・クリシュナだけに見られる最大の特徴です。クリシュナは、信者がどの態度を取っても、その対象として自身を現すことができるのです。

**クリシュナの神聖な遊び**

さて、クリシュナについてもう一つお話ししましょう。クリシュナの神聖な遊びについてです。これについてはいろいろと面白いエピソードがありますが、どれも重要な意味がありクリシュナの神聖な性質を物語っています。

赤子クリシュナは大変いたずらっ子でした。クリシュナの育ての親ナンダとヤショーダーは裕福でしたが、ある時クリシュナは土を食べてしまいました。これを見たヤショーダーは慌ててクリシュナの口をこじ開けて泥を取り出そうとしました。すると開いたクリシュナの口の中に全宇宙が見えたのです。夫のナンダも、自分も、ヴリンダーヴァンも全てがそこにあったのです。ヤショーダーが恐ろしくなってクリシュナの口を閉じると、そこにはいつもの赤子クリシュナがいました。

この他にも面白い話がたくさんあり、協会の出版した『バーガヴァタム』にもいくつか収録されています。他の出版社からもクリシュナに関する本が出ていますが、どれを読むにしても、皆さんに覚えておいてほしいことがあります。それは、クリシュナの遊びの話は実に数多くありますが、どれも単なる超能力の話ではないということです。どの話にも、神聖な意味が込められているのを忘れないで下さい。

**二つの重要な教えと実践**

では、シュリー・クリシュナの最も大切な教えについてお話ししましょう。一つ目は「執着せずに義務を遂行せよ」です。家住者の義務には、妻や夫、子供、両親に対して責任を果たすこと、などがあります。義務が何であれ、執着せずにそれを果たしましょう。執着するとどのような問題があるのでしょうか。結果が良くても悪くても、成功でも失敗でも、その結果に縛られてしまうのです。一つ一つの結果が、魂を縛る鎖の新たな輪となります。

移動の自由、仕事の自由、言論の自由、信仰の自由など、誰もが自由を望みますが、このような自由の究極な目的が解脱です。しかし解脱するには、私たちは「働き」をなさねばなりません。しかも執着することなく働きを、仕事をしなければならないのです。もし仕事に執着すると、心は平安を無くし穏やかでなくなります。成功すれば喜び、失敗すれば悲しみ、心は喜びと悲しみの間を揺れ動いて落ち着いた状態でなくなります。心が落ち着かなければ平安も静けさも得ることはできません。仕事に執着し続けると自由を得られません。『バガヴァッド・ギーター』の中でクリシュナは、行為の結果を主に捧げて自由になる方法をこう述べています。「心の中で、仕事の結果を全て私に捧げなさい」さらに、このように言っています。「いつも私のことを想いなさい」

この二つがシュリー・クリシュナのアドバイスです。私たちは仕事をしながら、この二つをいつも心に留めておきましょう。一つ目は「いつも神様を想うこと」です。『ギーター』でクリシュナはアルジュナに「いつも私のことを思いながら戦いなさい」と言いましたが、「戦う」とはここでは義務や仕事を行うことの象徴です。二つ目は「全ての結果を神様に捧げること」です。

この二つを常に忘れずにいれば、私たちは解脱ができます。簡単ではないですか。このアドバイスの通りに、朝から晩まで常に神様を想いながら仕事をすればすぐに悟りが得られるわけです。しかしもちろん、聞くのは簡単ですが実践するのは大変ですね。私たちは、今神様のことを考えたかと思うと、次の瞬間には予定や家族のことなど他の事を考え始めます。そしてまた神様のことを思い出してジャパ（神様の名前を繰り返し唱える）を始めますが、すぐにまた世俗のことを考えて心は神様から離れます。しかし、いくら一生懸命に義務を果たしても、解脱するにはこのプロセスを繰り返すしかないのです。これは「サハジャ・ヨーガ」（Sahaja Yoga）と呼ばれるもので、信者は常に神様のことを想うようにします。

**カリ・ユガとジャパ**

興味深い話があります。皆さん知っているかもしれませんが、世界の周期すなわちユガは四つに分けられていて、それぞれサティヤ・ユガ（Satya Yuga）、トレター・ユガ（Treta Yuga）、ドワーパラ・ユガ（Dwapara Yuga）、カリ・ユガ（Kali Yuga）と呼ばれています。一つのユガでは、人々のサットワ、ラジャス、タマスの性質について共通の傾向や特徴があります。サティヤ・ユガでは、誰もがサットワの性質が強く、ラジャスやタマスはあまり見られません。トレター・ユガではサットワの性質が弱くなり、ラジャスが強まってタマスはさらに強くなります。ドワーパラ・ユガではサットワが一層弱まってラジャスの性質がさらに強まります。カリユガでは、人々にごくわずかのサットワしかなくなり、ラジャスが多く、タマスはもっと多くなります。

それぞれのユガで、解脱するのにどのような霊的実践が最も適しているかが異なります。サティヤ・ユガでは瞑想が最もよく、トレター・ユガではヤッギャーすなわち儀式が適しています。ドワーパラ・ユガでは神様への礼拝が最も良いです。そして、カリ・ユガではラジャスとタマスの性質が強くなってサットワがごくわずかになり、この世に罪が蔓延するのですが、このようなカリ・ユガではジャパが最も適した霊的実践です。信仰心を以て心を込めて神様の名前を唱え続けることで解脱に近づくことができるのです。やってみる価値があるとは思いませんか。

私たちのいるこの時代はカリ・ユガです。見ての通り、ラジャスやタマスの性質が至る所に広まっていますね。大変世俗的な世の中でどこも罪でいっぱいです。ですから、神様の名前を常に唱えることで解脱を得ることができるのです。今日の講話の前に皆さんと一緒に「ハーレー・クリシュナ」や「ゴヴィンダ・ジャヤ・ジャヤ」などを唱えましたね。あのように唱えるとか、シュリ－・ラーマクリシュナの信者であれば「ラーマクリシュナ」と繰り返し唱えるのもいいでしょう。神様の礼拝を行うには礼拝を行う場所にいる必要がありますが、ジャパはいつでもどこでもできます。瞑想やヤッギャーを行うにはまず正しいやり方を覚えて、実践に適した環境が必要ですが、ジャパはいつでもどこでもできます。さらに、神様の名前はたくさんありますから、信者は好きな名前を選んでジャパができます。ジャパの実践に必要なのは少しのやる気と努力だけです。

ありがとうございました。